

方丈記に於ける無常觀について

——長明の淨土信仰と無常觀——

安田 義清

一、長明の淨土信仰

本節に於いて中心與即ち、諸往生思想より一向專修への移行と共に長明の淨土信仰を考察しようと思ふ。云う所の諸往生思想とは往生成就せんがために種々の行業を積み万行万善を修すべしとするのである、即ち菩提の資料往生淨土の因は難行難修であつた。淨土信仰に於ても弥陀を念じ西方往生を願求するにしても同様であつた。かように平安仏教に於ては總釋分單一な信仰が現れず難信仰が社会一般に広く行われたい様である、又天台宗に淵源する弥陀信仰及び法華信仰も玄く時代と流布していた事も注目される、即ち西方淨土を刻念して而も、「法華」を受持し法華受持の功徳を以て西方往生の資とするの信仰全盤を極めて法華と「弥陀」の両信仰が何等の予備もなくして常に一具併用せられたのである。①即ち「拾遺往生伝」②、「後拾遺往生伝」③、「日本往生極樂記」等に記されている所に淨土聖典、法華聖、金剛、般若、「般若心経」等を誦誦し、又弥陀念仏した事も見ても明白であらう、一般信仰界に於ても「念を弥陀にかけて心を妙法華に仰して弥陀の聖号を唱え法華をよむ」とあり、又「朝に法華を誦誦し夕に念仏をとらへ」④、又「あしたに懺法をよせて、六根を懺悔し夕には弥陀をよみて西方と九品往生を祈ること」⑤、并、全盤をさわめ、法華と念仏と常

方丈記に於ける無常觀について（安田）

方丈記に於ける無常觀についで（辛巳）

に相與し相伴ふを以て殆んど絶対的風潮となつたのである、又叡山常行三昧（法華三昧）と法華三昧（法華懺法）の盛行と共に前述の二、三例等を考へると所謂「朝禮日夕念仏」の朝懺法夕懺法と有り、「後拾遺往生伝巻中」に引く「法華懺法を行じ不斷念仏を修す」とある事より見ても明白である、而して平安仏教一般信仰の風潮はかようなものであつた。鎌倉時代（新仏教）に至つては諸行往生と種多い有信仰に対して所謂一行往生、一行念仏の行により一向専修を標榜する所に特色があるか。^⑤ 即ち法然の一向専修念仏、日蓮における法華懺

こゝで本論にかへり長明の浄土信仰を見るに、やはり平安中末期より鎌倉初葉にかけての思想信仰界の影響も強く受けていた事であらう。「方丈記」によると法然の絵像、菩薩の画法華經、往生要集等を草庵の中に所有していた事を見る時^⑥、やはり、法然念仏法華諷誦を修した事が伺はれる。而してその中心信仰は往生要集に説かれてゐる五念門的観念の念仏を指め、「紫雲の如く西方と包ふ」とある事より聖教未迎もあつた故で、而して往生要集の思想的影響が大であり、「方丈記」全体を讀く無常觀と共に社会一般の末法意識と想應して厭離穢土、欣求浄土の観念がひたすら長明をして浄土信仰を具得するに及び信仰するに至つたのであらう。こゝで鴨長明集に見えてゐる後の教に

「浄土の相かきあらはしたる中には何のふれるところを」

として、「たえずある他もありけり致卿の梅もさくらもうしや一時」^⑦ 又ある聖のすゝめにて吾等の教を厭離穢土欣求浄土によせてよみ侍りし中に融を

「白雲に消えぬばかりで夢の世をかりと鳴く音は己の身か何計月忘ぬ」^⑧

と歎つて居る所より見て、長明自身の浄土信仰に於ては専勝一向の念仏往生信仰ではなく、
観相観念的浄土信仰であつたと云つても過言ではなく、やはり平安時代の浄土教信仰の傾向が
強くあつた事が考へられるであらうか。

二、長明の無常観

この節では長明の無常観が如何なる社会背景と人世観で長明自身をもつて体験し、その内容
考察し、何から無常観の一端を伺ふ事とする。唯しも認める如く「方丈記」一篇を讀く思想は仏
教的無常観である事であらう、それは「方丈記」に詳しく述べられているように、長明自身思
へば一生の自己乗達の願望であつた所の鴨神社の禰宜にもなれず、後四十余歳の人生経験に至
た内に世の不思議をみる事由々、即ち都内力の三分の一を焼きつくした安元三年四月二十八日
の寧ろの大火、地獄の景風かと思ひしめ、「さるべきもののごとし」⁽¹⁰⁾と、疑はしめた治承四
年の治承の流風、或は「古泉は流れて新都未だ成らず、ありとしある人皆浮雲のあもひをな」⁽¹¹⁾
した同年の海濱遷都、又、道のほとりに飢え死ぬる類は救も知らずと云われた養和の大飢饉⁽¹²⁾
及びそれらに引き続いた疫病の流行、更に元暦二年の大地震⁽¹³⁾に到る様々の天変地異は長明をし
て「すべて世の中のものにくくわが身と栖^{より}とのほかなく、あだなる疎又かくの如し」⁽¹⁴⁾と云
ひしめ、又「何山の所を占めて如何なる業をしてか、しばしもこの身を濟し、たまゆうも心を
休むべき」⁽¹⁵⁾と語らしめて居る。そしてかくの如き自然の惡感に直面して、長明の辿つた道は
世を達し、身を捨てたる争であつた。そして都の内で幾多の「世の不思議」に傷められた長明の
心も、吉野山の奥に隠棲する事に依つて、「余は天運にまかせおしまふ、身は浮雲になら

へて、たのみず、まだしと止す^⑩との寂境に到達し得たりであつた。

又すでに述べた如く直搗身を以て経験した長明であつて外川は、六十歳の晩年方丈の草庵に住居して己が身の一生を靜かに冥想、回顧する時、しみじみと人生この世の無常が思ひかへされた事は云う違もない事である。「方丈記」冒頭に

「ゆし河の流川は絶えずして、しかももとの水にあらず、浪みに浮かぶ泡沫は、かつ消え、かつ結ひて、久しく止まるたる例なし、世の中にある人の栖と、又かくの如し^⑪」

とある事によつて、かゝる無常観に根柢を置いた長明の人生觀の結論的な告白と云えよう、又有名な「平家物語」巻頭に

「松園精舍の鐘の声、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯す、鷗鳴るもの久しからず、唯春の夜の夢の如し、盛る人も盛にはたひぬ、ひとへに風の前の塵に同じ^⑫」

と有り、諸行無常、即ち常恒なるものなし、有為転変、人の世の常なし事を如実に物語つてゐるのである、併して自然の草木も常恒なる事なし、四季の移りも同様である、この思想も長明をして強く人世觀の思想的に支配してゐる事も前述した通りである、そして長明の生存した社会に於て、このやうな事象を體驗したとき人間の應感一面をあらはに露呈すると共に人々の心に人の世の無常を痛感せしめるものがあつたのである、又長明自身の言已樂達、そしてあまねく衆生をほこつてゐた平家、「平六に非ずんば人に非ず」と云われた平家一門も、盛者必衰の理の通り没落したやうに現世が意のまゝにならぬと云う「曆世」の白雲、そしてそれらの白雲に基づいて眺められた現世に対する悲感、即ち無常観は、長明自身に於てもつていた事は

言を待たない所であらう。そして長明の歩んだ道は無常と其の対決に脅されたのである。併し無常に泣き無常を歎く切実な悲しみは深く認知せぬはならない。

こゝで長明の記している無常観即ち、常恒なるものなしを哀したものをあげて、長明の無常観の節を終る事とする、即ち「朝に死に夕に生するを習ひ、たゞ水の泡にぞ似たりける」²⁰、又「朝露の露に異なりず、或は露落ちて花残れり、残るど云へいも朝日に枯れぬ。或は花萎れて露なほ消えず、消えずといへども夕を待つ事なし」²¹とある。

以上簡単に題目の中心裏の一端をのべたのであるが、この他に無常観に關する重要な所、即ち長明自身が経験した「五大天地異し又その當時の社会背景、末法思想を説明しなすはならないが教数の關係上、二小を以つて終りとする。

（尚この小論は卒業論文の二、三節であることを記しておく。）

（研究要目・四回生）

註 1、 殆悉弘著「日本仏教の開展とその基調」上、一〇二—一〇三頁参照

2、 拾遺往生傳卷中

3、 日本往生極樂記

4、 後拾遺往生伝卷中

5、 殆悉弘著「日本仏教の開展とその基調」下、一一五以下

6、 紹谷直樹著「方丈記通講本」八七頁

方丈記に於ける無常観について（守田）

方丈記に於ける氣常觀について（母可）

- | | |
|----|---------------------|
| 17 | 往生要集卷中（淨土衆全書心）八九頁以下 |
| 8 | 細谷直樹著「方丈記通稿本」八七頁 |
| 9 | 羣書發微 鴨長明集八七九（八八〇頁） |
| 10 | 〃 |
| 11 | 細谷直樹著「方丈記通稿本」三三頁 |
| 12 | 〃 四一頁 |
| 13 | 〃 五〇頁 |
| 14 | 〃 五九頁 |
| 15 | 〃 六七頁 |
| 16 | 〃 七二頁 |
| 17 | 〃 七九頁 |
| 18 | 〃 一四頁 |
| 19 | 平家物語（有明堂文庫本）一頁 |
| 20 | 細谷直樹著「方丈記通稿本」一七頁 |
| 21 | 〃 二一頁 |